



夢追い人

岡インテリア工業 岡吉穂社長さん

障害者の方の喜ぶ姿を見ると、こっちまで嬉しくなるんですよ。
もうやみつきになりますね。

「これまでだれかの手を借りなければ生活できなかったが、トイレやお風呂を工夫すれば、障害を持つている人も自立できる。」

こう喜びを言い表したのは、半年ほど前、福岡市内のマンションで二人暮らしを始めた車いすの男性(39)。この記事は、佐賀新聞で取り上げられている。

この男性にバリアフリー家具を納品したのは、実は大川商工会議所会員の岡インテリア工業(岡吉穂社長)。早速取材に出かけた。

岡さんは、開口一番こう語ってくれました。「障害者の方の喜ぶ姿を見ると、こっちまで嬉しくなるんですよ。もうやみつきになりますね。」

3年前から、バリアフリー研究会に所属している。バリアフリー研究会では、佐賀医大の斉場教授が発起人になって、障害者の方、介護の現場で働いている方、また、メーカーが集まって、きたんのない意見交換を行っている。

「最近では高齢化問題やエコロジーのことが声高に叫ばれるようになり、こぞって多くのメーカーがバリアフリーに取り組むようになりました。立派なものを造ろうとして取り組んでいるのは良いことだと思います。でも、残念に思うのを、真の意味で障害者に密着した製品が少ないことです。障害者の方や、現場の方々と交流持ち、直接お話を聞くことで、垣根を越えることが出来るのだと思います。彼らにと心を開いた交わりを通して初めて、本当の必要に気づくのだと思います。」

車いすの男性に納めた製品は、マ

ンションの造作を変えずに生活できる、健常者にも使いやすいことが特徴となっている。車いすのまま移動できるベッドやソファを兼ねたソファベンチは、足の部分に車いすが入るようスペースを空けたり、移動がスムーズにできるよう手すりを備えている。

トイレはどうだろうか。便器の前に木の台を付けて、取り外し式のマットを置くように工夫した。また、台所には、車いすの高さに合わせた百四十センチの戸棚を配置し、ふろ場には浴槽と同じ高さにするのを置き、移動に負担がかからないようにしている。

こうしたバリアフリー家具を造るに必要な要素として、依頼者とのコミュニケーションの大切さも強調する。依頼者の必要を正確に把握するためだ。

だから、商業主義一辺倒の取り組みには否定的である。

「バリアフリーがブームだからといって、安易に取り組むことは出来ないと 생각합니다。すぐに採算がとれるものでもありませんし、また個々の障害の種類、度合いによつて、大きく内容が違ってきます。メーカーサイドの考え方だけでは、決して良いものは出来ないのです。」

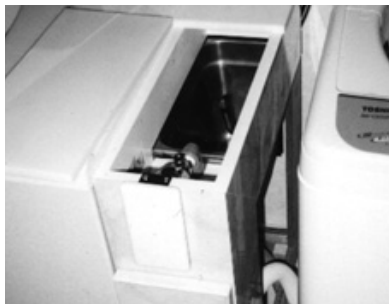
夢を語ってもらった。バリアフリー研究会についてはすでに述べたが、岡さんは大川にもそうした研究会、というよりも休みの日、お互いにビールでも飲みながら、心地よい雰囲気の中でバリアフリーについて語り明かせる場を持ちたいと願っている。

「この分野での製品作りは、0か



ら1にいくよりも、2から10にいく方がやさしいと思います。新しい発想に基づく開発には大変な労力があるものです。それに大川にはほかの土地にない、職人の技術があります。それを生かすためにも互いを研鑽できる場があれば、嬉しいですね。それは大川の活性化にも役立つと思うのです。」

関心ある方は、気軽に連絡してほしいそうだ。



尿瓶洗い機